



# 福島医大病院ニュースレター

編集・発行/附属病院患者サービス向上委員会

〒960-1295 福島市光が丘1番地 / TEL (024) 547-1111 ホームページ <http://www.fmu.ac.jp/byoin/index.php>

## 新任挨拶

### 誰からも選ばれる明るい病院を目指して

病院長 齋藤 清

平成28年4月より、紺野慎一前病院長の後任として福島県立医科大学附属病院長を務めさせて頂くことになりました。全力で勤めますので、どうぞ宜しくお願いいたします。

福島県立医科大学附属病院の目標は「誰からも選ばれる病院」です。県民の皆様や県外の方からも安心して選んでいただけるように、私たちは常に患者さんに寄り添って優しさを忘れず、お一人お一人に最適の医療を行うように、先端医療の導入を含めた日々の活動を続けます。学生や研修医からも選ばれる病院として、病院の環境を整備して教育にも全力を注ぎ、福島県に貢献できる医療人を育てます。また、医大病院の職員が笑顔で皆様のために働き、職員であることに誇りを持つようにしたいと願っています。

新しい病棟（みらい棟）の建設や駐車場の整備のために、皆様にはご迷惑をおかけして申し訳ありません。今年中にみらい棟が完成しますので、今しばらくご容赦ください。みらい棟には、小児と女性の外来及び入院部門、救命救急センターなどが移転します。県内の新生児やお子様、妊産婦やご婦人には、これまで以上に安心して快適に受診していただけます。みらい棟の完成に続いて、旧病棟（きぼう棟）とみらい棟の間のスペースに血管撮影装置やMRIを備えた高機能手術室が増築されます。来年中に稼働になりますと、最先端の手術環境が

整います。医大病院での手術を待っておられる方に、最善の治療をお待たせすることなくお届けしたいと思います。また、紺野慎一前病院長が着手された入退院システムと地域連携の強化も進めます。入退院システムが全面稼働しますと、入院決定時からコーディネーター看護師が面談して入院治療や退院に向けた情報を伺い、入院及び退院が滞りなく進むことで皆様へのより良いサービスが実行できます。かかりつけ医を持っていただくこともお勧めしています。医大病院ではかかりつけ医の先生との連携を密にして、必要な時にいつでも受診または入院していただけるようにしております。普段の診療はかかりつけ医の先生を受診してご相談ください。



私たちは、県民の皆様と共に大震災・原発事故を乗り越えて、希望と笑顔が溢れる「ふくしま」を目指しています。皆様のご支援とご協力を、どうぞ宜しくお願いいたします。

### 第34号のなにかみ

- 1ページ …… ○新任挨拶
- 2ページ …… ○新任挨拶
- 3ページ …… ○熊本地震派遣職員からの報告
- 4ページ …… ○リレー通信「けやきの会」  
○ふくしま国際医療科学センター整備について

### 病衣・付添寝具

清潔と快適をクリエイトする。

# DOJINSHA

〔ご利用・お問合わせ先〕

株式会社 同仁社  
医大リネン室

電話 024-547-1111  
内線 3081

## マチのほっとステーション

# LAWSON

ローソン福島県立医科大学附属病院店（エレベーターホール隣）  
ローソン福島県立医科大学店（7号館内）  
ローソン福島県立医科大学会津医療センター店



## 脳神経外科部長 佐久間 潤

平成 28 年 4 月 1 日から齋藤清教授が福島県立医科大学附属病院病院長に就任されたことに伴い、脳神経外科部長を務めさせて頂くことになりました。どうぞ宜しくお願い申し上げます。

当科の対象疾患は脳血管障害や脳腫瘍の外科治療を中心に、頭部外傷、て

んかん、小児奇形、水頭症、等、多岐にわたります。

脳血管障害では、開頭手術だけでなく血管内手術を積極的に導入しています。特に脳梗塞の超急性期症例では、地域の病院で t-PA を静注し (Drip)、血管内治療ができる病院に転送し (Ship)、そこで血管内治療を駆使して血栓を摘出・回収する (Retrieve) という、「Drip, Ship, and Retrieve」の一翼を担っています。また今年の 6 月から疫学講座の全面的なご協力を得て、県内の病院に搬入された全ての脳卒中症例(脳梗塞、脳内出血、くも膜下出血、など)の登録事業 (FSN: Fukushima Stroke Network) を開始いたします。脳卒中の現状および発症因子を解析し、県民健康調査事業とも突合することで、福島県内の脳卒中発症予防への知見・提言ができることを期待しています。

脳腫瘍では麻酔科学講座のご協力を得て、手術中に患者さんを覚醒させて神経症状を確認しつつ最大限の摘出を行う「覚醒下手術」を県内で唯一導入し、良好な結果を得ています。

先天性奇形や小児水頭症、てんかんの患者さんについては県内外の病院からご紹介をいただき、福島県の脳神経外科の要としての役割を果たしていると自負しています。

また積極的にナビゲーションシステムや電気生理学的モニタリング、神経内視鏡を導入し、低侵襲かつ安全な手術を行っています。

院内外の先生方、医療スタッフの皆様には、今までもスムーズでシームレスなご協力を頂き、心より感謝いたしております。どうか今後ともご指導、ご鞭撻のほど、宜しくお願い申し上げます。



## 救急科部長 救命救急センター長 島田 二郎

本年 4 月 1 日より救急科部長、救命救急センター長を務めさせて頂くことになりました。

本学の救命救急センターは、福島県北エリアの3次救急を担うばかりでなく、ドクターヘリの運営により、福島県全体の重症患者救命の最後の砦としての

機能を果たさなければなりません。センター長としての私の仕事は、これまで築かれてきた救急医療システムをさらに発展・充実させること、救急疾患に適切に対応できる医師を育成すること、そして、救急医学の発展に寄与することであると考えております。われわれ救命センターの使命は、いつでも迅速で高度な救急医療を提供することにあります。最近、高齢化、疾患の多様化、そして治療の高度化に伴い、求められる救急医療のレベルも急速に高まっています。この状況に対応するためには、われわれ自身の日々の研鑽はもちろんですが、それに加えて院内専門各科・各部門との連携、病院前救護、1次2次救急、そして救命後の継続治療を担当してくださる消防機関や地域の病院の皆様との連携は必須です。また、行政機関との連携や市民の皆様への救急医療への理解を深めることも重要です。このように、多くの皆様のご協力無しには、より良い高度な救急医療の提供はありえません。この協力体制の維持・発展こそ、一つ目の取り組むべき仕事であります。

また、高度な医療を提供する大学病院では、医師の専門化が進み、専門分野から外れた疾患や、多分野にわたる疾患への対応を経験する機会が少ないのも実情です。どんな疾患であれ、適切な初期対応を行い、必要な処置の後、専門的治療への道筋を立てる救急医療は医の原点で有り、誰もが身につけるべき基本的能力であるはず。この医の原点を将来の医療を担う医学部生や初期研修医に対して伝えていくことが二つ目の大きな仕事と考えています。

さらに、福島県では、代表的な救急疾患である心筋梗塞、脳卒中の死亡率が非常に高いという残念な現状があります。現時点でこの原因がどこにあるのかは判明しておらず、原因検索の第一歩として、疫学研究を行うことはとても重要です。われわれは福島県と協力して新しい救急搬送システムを導入し、これら疾患の(病院前データを含む)データベース構築を図り、疫学調査を行う体制を整備しつつあり、これを発展させることが三つ目の仕事になります。

最後に、福島県は原子力災害に未だ直面しており、また、近年の災害の多発は、いつ何時どこにでも新たな災害が起こる可能性を秘めています。災害医療と救急医療は切っても切れない関係であり、新設された災害医療部と共に災害への備えを構築して参りたいと思います。

以上、より良い救急医療を提供できるよう今後も励んでいきたい所存ですが、そのためにも関係各課の皆様には、ご協力をいただきたく、どうかご支援よろしくお願い致します。

昨年11月に本学附属病院に発足した災害医療部は、熊本県を中心に断続的に続く地震に対して寄せられる医療支援要請の情報を一元的に管理し、附属病院長の下、支援チームを編成して迅速に送り出すことができました。その成果は6月17日現在、延べ26人に及び、6つの支援チームや医師の派遣となりました。

### ■災害派遣医療チーム(DMAT)

本学からの医療支援派遣第1陣となったのは災害派遣医療チーム(DMAT)の5人です。4月16日から20日まで、主に阿蘇市と周辺地域の避難所や医療施設の現状の把握と支援、さらに、後続のDMATチームを避難所や医療機関に派遣調整する本部活動に従事しました。

### ■救護班

福島県派遣第1班として5人のチームを4月22日～28日まで派遣。主に熊本市内での医療支援体制を組み立て、運営する活動を展開しました。その他にも本部運営支援に医師が1名熊本入りしたほか、さらに、救護班の医師だけは5月1日まで現地に残り、作りあげた支援体制を、現地自治体と医療機関で運営できる状態へ繋ぐお手伝いもしました。

### ■DVT検査チーム

エコノミークラス症候群防止のための下肢エコー検査を行うDVT検査チーム4人が5月2日から5日まで、熊本市内の避難所で数多くの避難者の検査に携わり、また医療従事者への検査方法の指導等を行いました。

### ■産科支援

5月2日から8日まで、日本産科婦人科学会の要請に応じて医師が1名、熊本市内の産科医療機関へ入り、被災地における妊産婦さんの健診や出産を支援しました。

### ■災害派遣精神医療チーム(DPAT)

5月3日から9日まで、災害派遣精神医療チーム(DPAT)5人が南阿蘇村に活動拠点を設け、避難所における住民の心のケアに従事しました。

### ■日本医師会災害医療チーム(JMAT)

6月5日から17日までの間、日本医師会災害医療チーム(JMAT)として、計4名を派遣し、現地ニーズに沿った支援を行いました。

派遣先では本学のどのチームも東日本大震災の経験を買われ、非常に高い期待と評価をいただきました。また、被災者の皆さんから「福島もまだまだ大変なのにありがとう」と声を掛けていただくメンバーも多くいたということです。

災害医療部は、東日本大震災の経験と反省を踏まえ、本学における情報の受発信の一元化を徹底しました。その結果、福島県、熊本県との情報共有やニーズの把握がスムーズに行え、迅速な支援対応に繋がりました。

熊本では、現在もまだ一部地域については医療支援を必要としています。今後も、地元ニーズに応じた支援を継続してまいります。



病衣・タオル・紙おむつ・日用品

手ぶらで入院・手ぶらで退院

アイレンタル



お申込・お問合せ先：レンタル受付窓口

024-548-8777

\*院内1階、入退院受付横  
月～土曜日 9:00～17:00 (日祝祭日休業)



株式会社アイシステムオフィス

## リレー通信 病院ボランティア「けやきの会」

### 病院ボランティア「けやきの会」会員へ 感謝状が贈呈されました 病院経営課

先日、齋藤清病院長より「けやきの会」会員へ感謝状が贈呈されました。

毎朝欠かさず、外来患者さんの受診受付のお手伝いや、車椅子での移動の介助、院内の案内などのボランティア活動を「けやきの会」の皆さまが行っています。

当院は車イス利用を希望する重症患者の方も多くいらっしゃいます。会員の皆さまの親身な対応と振る舞う笑顔は患者さんからも大変好評であり、病院には欠かすことのできない存在となっています。

2001年の設立より長年にわたり会員の皆さまには、患者さんに対し、親切で暖かな思いやりを持って接して下さって

おり、患者さんの安心感につながっているものと考えています。改めて当院からも感謝申し上げますとともに、今後ますますのご活躍をご期待申し上げます。



## ふくしま国際医療科学センター整備について

## 小児腫瘍内科

### ～みらい棟(D棟)5F こども医療センター 無菌室～

新しくできるこども医療センターには、新たに8つの無菌室を整備します。無菌室は主に造血細胞移植を受ける患者さんが使用しますが、20年前に行われたような「完全無菌」を目的にしたものではありません。以前は、移植中は白血球が0になり免疫力が極度に低下するので、菌による感染症から身を守るために完全無菌状態が必要と考えられてきました。しかし、移植中の感染症の多くは患者さんの体内にいる菌により起きることが分かり、無菌状態を作っても感染症の発生は防ぐことはできません。

とは言っても、無菌室が不要なわけではありません。無菌室の最大の目的は特殊な真菌(カビ)の感染予防と外からのウイルスの侵入防止であり、この目的のためには効果があることが証明されています。

福島医大では、幼少の患者さんにはご家族の付き添いを受け入れ、小中学生には須賀川養護学校医大分校の先生方と協力し、無菌室内でのベッドサイド学習を推奨し、できるだけストレスのない、普段に近い環境で移植ができることを目指しています。

福島医大へは全国から難治性白血病の患者さんが移植を目的にやってきますが、これまでは無菌室が不足しているため受け入れができないことも多々ありました。これからはこの無菌室をフル稼働し、全国の白血病をはじめとする難治性疾患の患者さんにご家族の期待に応えることができるよう体制を整えていきたいと思っております。



すべてを地域のために  
**東邦銀行**

ご利用・お問い合わせは **福島医大病院支店**

窓口営業時間：平日午前9時から午後3時

電話 024-548-5331 (受付時間:平日午前9時から午後5時)

### スターバックスコーヒー福島県立医科大学附属病院店

**営業時間** 平日 7時～20時  
土日祝 9時～19時

アメリカ シアトル生まれのスペシャルティコーヒーストア。高品質のアラビカ種コーヒー豆から抽出したエスプレッソがベースのバラエティ豊かなエスプレッソドリンクやパストリー、サンドイッチをお楽しみいただけます。

